

池田大作語録 人生の座標

Tips on how to lead a happy life



グラフ社

池田大作語録

人生の座標

Tips on how to lead a happy life



仲間よ、これは書物ではない
これに触れる者は人間に触れるのだ
ウオルト・ホイットマン『草の集』より

目次

序 4

希望の語らい 人間関係についての考察 9

心の輝きのために 哲学についての考察 23

優しさと強さ 生命の不可思議についての考察 47

次代を担う人^{にな}と共に 青春についての考察 59

苦^くに徹^{てつ}すれば珠^{たま}と成^なる 信念についての考察 73

負けない勇気 樂觀主義についての考察 97

励^{はげ}ましは「万の力」 友情についての考察 117

「女性の世紀」の太陽 母の心についての考察 125

「教育のための社会」へ 幸福^{いしずえ}の礎についての考察 135

精神^{だいいこうかい}の大航海 読書についての考察 157

創造と交流の喜び 芸術・文化についての考察 171

人生の黄金の秋 長寿社会についての考察 187

人間共和の未来を 日本と世界についての考察 203

各章の扉の写真は、著者の撮影による

池田大作語録

人生の座標

Tips on how to lead a happy life

仲間よ、これは書物ではない
これに触れる者は人間に触れるのだ
ウォルト・ホイットマン『草の葉』より

目次

序 4

希望の語らい 人間関係についての考察 9

心の輝きのために 哲学についての考察 23

優しさと強さ 生命の不思議についての考察 47

次代を担^{にな}う人と共に 青春についての考察 59

苦^くに徹^{てつ}すれば珠^{たま}と成^なる 信念についての考察 73

負けない勇気 楽観主義についての考察 97

励ましは「万の力」^{はげ} 友情についての考察 117

「女性の世紀」の太陽 母の心についての考察 125

「教育のための社会」へ 幸福の礎^{いしずえ}についての考察 135

精神の大航海^{だいかうかい} 読書についての考察 157

創造と交流の喜び 芸術・文化についての考察 171

人生の黄金の秋 長寿社会についての考察 187

人間共和の未来を 日本と世界についての考察 203

各章の扉の写真は、著者の撮影による

序

それは、第二次世界大戦の末期、東京に激しい空襲が続いていた最中のことでした。焼け残った、ある工場の壁に、十七歳の私は、自作の詩を一節、白墨で書き付けたことがあります。

戦時中は、何かの時に居場所を書き残したりして連絡を取り合うために、みな、白墨を持ち歩いていたのです。

私は、自分の名前は記さず、心から湧き出ずるままに、詩を綴りました。

あとで壁を見ると、私の詩の最後に、誰かが「その通りだ。その通りだ」、また次の人が「この詩の通りだ。この詩の通りだ」、さらに別の人が「感動した。よくぞ歌った」と続けて、書いてくれておりました。

残酷な戦争によって、何もかも破壊され尽くした廃墟の街にあって、一つの青春の詩、一つの青年の言葉が広げゆく、生命と生命との共鳴は、なお健在であったのであります。

その後、私は、日本の軍部権力と真っ向から戦った戸田城聖先生と出会い、平和と正義の波瀾万丈の言論闘争に、身を投ずることとなりました。

かけがえのない人生を、いかに正しく生きるか、いかに断固として生き抜くか。この世に生を受けた誰人にとつても、根本の課題であり、根幹の命題であります。

そして、この尊き「生」と「生命」に向かつて、希望の指針を贈り、勇気の力を贈りゆく源泉こそ、人間が人間に語りかける、励ましの言葉に他なりません。

「励まし」のことを、英語で「インカレッジ」、すなわち「カレッジ（勇氣）を吹き込む」と表現していることは、大変に象徴的であると、私は思ってきました。

古代ギリシャの哲人アリストテレスは、「幸福」と「好運」を論じて、次のように述べています。

「両者（幸福と好運）はむろん同一ではない。好運も過ぎてはかえつて阻害的な役割を果たすこととなり、おそらくはもはや好運と呼ぶのが正しくはないことになるであらう。

好運の限界は、実際、幸福への関係において定まる」（高田三郎訳）
味わい深い幸福観です。

たしかに「幸福」の本質は、表面的な「運の好き」などに左右されない、奥行きと深みを湛えております。

「生きる」ということは、さまざまな難問を間断なく突きつけます。そこには、喜びもあれば、悲しみもある。成功もあれば、失敗もある。栄光もあれば、屈辱もある。愛する

者との出会いがあれば、別れもある。長い人生において、人それぞれに、大なり小なり、明と暗の経験は避けられません。

しかし、暗いトンネルは、明るい外光へ至る必然の試練です。

朝の来ない夜はない。

いな、むしろ、最も深い闇を、耐えて耐えて耐え抜いた人こそ、真に「生きた」人と言つてよいでありましょう。苦をば苦とさとり、樂をば樂と開きながら、前へ、また前へ進み抜いてこそ、究極の人生の勝利を飾りゆくことができるからであります。

このような「耐える」力は、ただ逆境にのみ発揮される、パッシブ（受動的）な強さにとどまりません。

それは、人々と手を携えながら、人生や社会を豊かに創造し、建設し、この世界を变革していかうという、アクティブ（積極果敢）な力にも連動しております。

真実の幸福な人——それは、皆を幸福にできる人ではないでしょうか。

太陽の光に対抗しうる闇は、一つもありません。

その太陽を、わが生命の中に、どう見出し、どう赫々と輝かせていくか。この探究と向上が、人間の一生の旅路であるとも言えます。

そのような人生の旅人である私たちに、人類の教師ソクラテスは、こう語りかけて、励

ましてくれます。

「音をあげるわけにもいかないし、弱気になってもいけないのだ、われわれの仲間よ」
(田中美知太郎訳)

私も、この半世紀、わが友に、でき得る限り、励ましの言葉を贈りたいとの願いを込めて、対話を重ね、ペンを走らせ、スピーチを続けてきました。また、文明と文明を結ぶ、世界の識者との対談集も、三十点に及び、教育の交流を深める、海外の大学での講演も、三十回を超えたようです。

以前、グラフ社から、私は、『女性抄——箴言と随想』という、素敵な装丁の本を出版していただきました。

光栄にも、この一書は、花嫁となる方に親しい友からの餞として贈られることもあると伺っております。

このたび、同じグラフ社から、さらに幅の広い人生論の発刊のお話をいただきました。ここ数年の私の著書を中心として、「語録」の編纂の労を執ってくださいだったので、

未来を担いゆく高校生たちに向けて懇談を重ねた『青春対話』、子育てや家庭論を語り合った『二十一世紀への母と子を語る』、長寿社会の生き方を論じた『第三の人生を語

る、『女性の世紀』を展望した『母の詩』、私の人生記録として書き残している『大道を歩む』、そして二度にわたって発表した『教育提言』などから、丹念に言葉を選び出し、整理してくださいました。

先人・先哲の人生論には遠く及ばないことは百も承知ですが、この二十一世紀を共に生きる方々が、希望と勇氣に燃えて、その人らしい太陽の輝きを放ちゆく一日また一日であられることを祈りつつ、本書を江湖に送らせていただきます。

ささやかな、心から心へのこの贈り物が、読者の皆さま方の尊き人生にとって、何らかの糧となり、少しでもエールとなれば、望外の幸いです。

発刊に当たり、真心あふるる御尽力をいただきました、グラフ社の西澤昌司・常務取締役、山田紀子・取締役、心より厚く御礼申し上げます。

二〇〇一年八月十四日

五十四年前、師・戸田城聖先生に初めて出会った記念の日に

池田大作

希望の語らい

人間関係についての考察



機中より富士山



1

あいさつは、はつらつとした人間性の発露^{はつろ}であり、伸びようとする精神の弾^{はす}みである。

外交といっても人間の出会い^{であ}から始まり、それはあいさつから始まる。大^{おお}いなる友情の海原^{うなばら}へと船出^{ふなで}する、心の交流の門戸^{もんこ}こそ、あいさつにほかならない。

2

ある意味で、人生は「出会い^{つづ}」によって綴^{つづ}られているといつてよい。いつしか忘れ去^さられていく出会いもあるかもしれないが、一瞬^{いつしゆん}に人生を変^かえる出会いもある。ゆえに、一つ一つの出会いを大事にしていきたい。



大切なことは、相手に同情する——あわれむ——ということではなくて、「わかってあげる」ということです。「理解」することです。人間は、自分のことを「わかってくれる人がいる」、それだけで生きる力がわいてくるものです。

世界に友情を広げるといっても、じつは、「二対一たの関係」の積み重ねなのです。小さな一歩一歩を、一人一人を、徹底てつていして大切にしてこそ、大きな友情の世界ができるのです。一対一の関係です、どこまでも。



5

「君が愁^{うれ}いに我は泣き、我が喜びに君は舞^まう」である。友の身を、わがこととして心配する、思いやる。真の人間の絆^{きずな}とは、こうして築かれ、やがて団結^{だんけつ}の力を生み出すのであろう。

6

人をうらやんでも、自分がみじめになるだけで進歩はない。そういう感情に負^まけてはいけない。縛^{しば}られてはいけない。要するに、「人を妬^{ねた}む」より「人に妬まれる」ほうが、ずっといいのではないだろうか。



一対一の魂の触発しよくはつにこそ、確実かくじつで深い人間の絆はなが生まれる。ゆえに今日もまた、明日もまた、悩める友の嘆なげきに耳を傾かたむけ、励はげまし、希望あたを与えていくことだ。

親子といっても、人間関係です。結局けつぎよくは真心まごころです。策さくではない。心でしか、人間の心を動かすことはできないのです。

一つの出会いは、小さな点のようなものかもしれない。しかし、そうした“点”と“点”が、やがて“線”となり、“面”となって広がっていくのである。